候事、何れを指して申候哉、

答曰、仰のごとく、近代當所名跡等を記し候書も數多相見へ候得共、江戸の號の事慥ならず候、愚○酒井忠昌が管見仕候に、山中氏被相記候中古治亂記十五卷、江戸城草創之條下、其略に、扇谷上杉修理大夫定政之老臣を、太田備中守資清入道道眞と云、武州都筑郡太田郷之地頭也、其嫡男鶴千代丸と云、成長之後、太田源六資持と號す、後に受領して任備中守、改資長、剃髪して道灌と稱す、當御城を康正二年に普請、初め繩張して、長祿元年四月迄僅兩年之內、巧匠の功成就しける、都五山之都万里和尙、古詩を引て是地を美たる詩に云、窻含西嶺千秋雪、門繫東吳萬里船、又五山より被贈たる詩之內に、江戸城高不可攀、我公豪氣早東關、三州富士天邊雪、快作靑油幕下山と云々、右之詩の句にも江戸城と有之、別號なし、去かれば道灌城築の時に、其地名に依つて直に名付たるべし、既に鎌倉將軍の時代より江戸といふ稱號の士あり、此は平氏類葉よりして、武藏の士と稱すれば、江と云地名其前有べし、愚案に、江に望める意成べし、抑當御城天正年中御入國以前、今の雉子橋の外より北の方大沼にて、此より西の方もちの木坂下迄入江にて有し由、小川町も寛永年中、外廓無之以前は、牛込よりの流は、どんど橋の向へ直ぐにもちの木の方へ流れ行、又小石川の流は、今の土手三崎稻荷の邊より、一ツ橋の御堀の川江流行去よしなり、然ば唯今御城內、古へより江戸と名付所なるべし、總名となり候事は、其頃近邊の根城たるによりて也、

〔武江披抄〕〔一〕南留別志云、江戸、水戸、りうと、つくと、今戸、花川戸など地名に多し、戸口によりての名なるべし、覃按、此說非なり、沙石集六下武藏の江所トアリ、是江戸ノコトナリ、入江ノアル所ヲ江所ト云シナルベシ、靈岩島ノ古名ヲ江戸中島ト云、江戸橋ナド云名モアルキコトニテ、此邊眞ノ江戸ナルベシ、

〔江戸紀聞〕〔一〕江戸大意